

1 香道

～香りを聞く芸道～



三條西 堯水
SANJONISHI Gyosui | 香道御家流／宗家

茶道・華道と並ぶ日本三大芸道の一つである香道は、和歌とも結びついた雅な世界だ。日本における香り文化はどのように発展し、継承されてきたのだろうか。香りを“聞く”と表現する香道の奥深い香りの世界を紹介する。

香の歴史

香道を語る前に、香の歴史について触れておく必要があるでしょう。香という漢字は一説によると、黍という漢字と甘いという漢字が合わさって生まれたといわれています。これは黍を燃やすと甘い香りがすることに由来するそうです。興味深いことに英語のperfume(香り、芳香、香料や香水)という単語はラテン語のper(～を通して)とfumum(煙)から生まれたとされています。つまり「煙を通して良い香りがする」ということを表します。どちらも火を燃やすことによって発生する匂いのもとになっています。つまり人間が火を使い始めた時から香りを認識するようになったということを表しています。

それでは日本において香が認識されたのはいつ頃からでしょうか。最初に文献に登場したのは『日本



沉香

書紀』で、595(推古3)年に淡路島で島民が流木を集め竈で燃やしたところ、一本の木から芳香が発生し、島民は竈からあわててそれを取り出し朝廷に献上したと記されています。記録として残る最初の記述ですが、実際はそれより少し早く、6世紀中頃の仏教伝来とともに香も日本に伝わってきていただろうと考えられています。当初日本において香は仏教儀礼に使用されました。飛鳥・奈良時代には法隆寺や東大寺などの大寺院で、中国や朝鮮から輸入された香そのものを使用しました。

日本の香の歴史における重要人物の一人は、奈良の唐招提寺に祀られている鑑真和上です。彼は唐から仏教の戒律を伝えるために日本へ来ました。同時に薫物(練香)の製法を日本へ伝えました。薫物は香木だけでなく、麝香などの各種香料を粉末にし、蜂蜜などで練り固めて作られます。色々な香料を調合することによって、自由に香りを作成できるようになります。

鑑真の伝えた薫物は、当初はそれまでの香木と同じように仏教儀礼のために用いられます。都が奈良から京都に移り、時代の主役は平安貴族たちとなります。彼らは薫物を仏教儀礼だけでなく、現代人と同じように自分のために使うようになります。そこで使用される薫物はオリジナルな調合をされていました。部屋で香を炷く空香や、伏籠を使用して着物に香りを炷きこむ薫衣香は、現代人のアロマや香水を彷彿させます。



聞香炉。これで香を聞く



香を聞く

また、当時の平安貴族達は物合の遊びを盛んに行っています。自分達の作成した和歌を比較し優劣を決める歌合からはじまり、色々なものを比較の対象としていきます。良い鳴き声の鳥を比較する鳥合、珍しい貝を持寄り比較する貝合、現代の貝合はハマグリ(ハマグリ)の貝殻を使ってトランプの神経衰弱のように遊ぶ物となっていますが、この遊びは元々貝覆と呼ばれていました。

この色々な物同士を比較する遊びと、貴族達が工夫して作成した薫物から、この薫物を比較する遊びが誕生したことは必然と言えるでしょう。それが薫物合で、後の香道の源流となっていきます。

時代が武士の時代になると、彼らは取り扱いが簡単で、より純粋な香りを発する沈香を使用するようになります。合戦前には沈香を炷き、心を静めたといいます。その遊び方も薫物合から香合、そして炷継香、組香へと変わっていきます。

室町時代、戦乱や政治を嫌った八代将軍足利義政は、京都東山の別荘(今の慈照寺銀閣周辺)に引き籠ってしまいます。そこで彼は、自分の友人・知人の一流文化人を集め趣味の生活を始めます。茶・香・能・花・連歌など、我々現代人が直接目にすることができる日本文化がそこで熟成されていきます。香は後の志野流の祖で義政の同朋衆志野宗信と、御家流の祖で当時随一の文化人で公家の内大臣三條西実隆の二人により作法などが作られていきます。

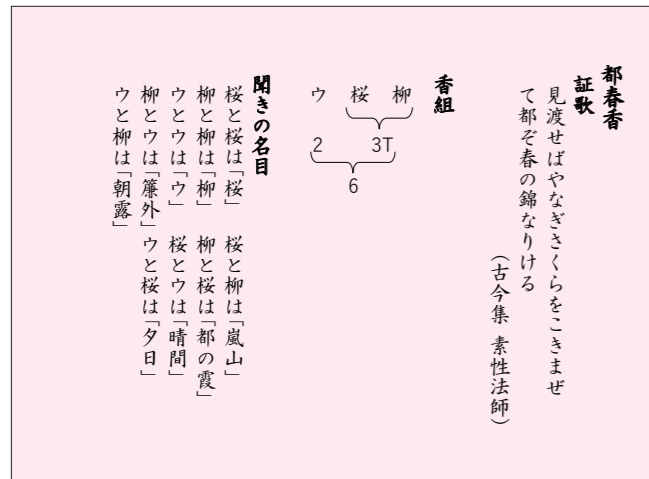
この香道は江戸時代になると、大名や公家などの上流階級の人々だけでなく、一般の人々へも広く知れ渡り、行われるようになりました。

香道で使用する香

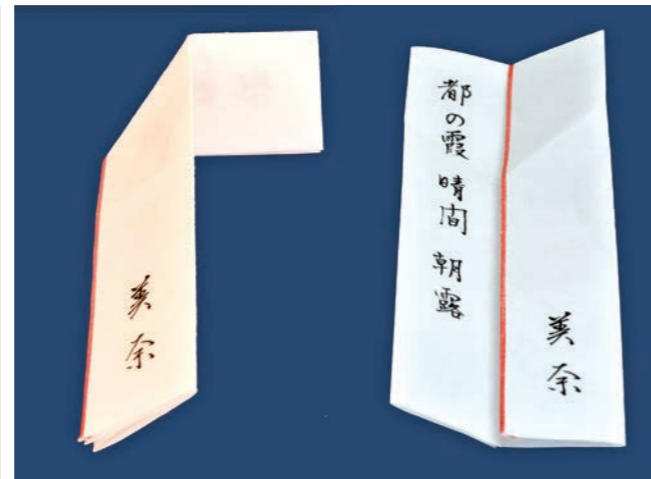
世界中には色々な香を発する香料があります。香料には麝香などの動物から取れる物や、桂皮などの植物から取れる物があります。その様々な香料の中で、香道では沈香をはじめとする香木のみを使用します。

沈香はジンチョウゲ科の東南アジアにのみ生える木です。この木自体は香りがしません。この木が外的要因によって傷つき、そこを保護する為に空気中の細菌等を取り込み樹脂が形成されます。その後、寿命等により木が枯れ、地中に埋まります。木質部は土に還りますが、樹脂部分は脂分を有するので腐らずに地中に残り熟成されます。その地中に残った樹脂部分を採取することによって沈香が得られます。この形成過程にはまだ謎も多く、香りが良い物が必ずできるわけではありません。その為、神秘的な香木と言われることもあります。

実際の香道の世界では、この香木をその香りにより細かく分類して使用します。それを六国と称します。六国は伽羅・羅国・真南蛮・真那賀・佐曾良・寸間多羅・新伽羅となります。六国の香りの特徴は五味と言われ、味で表されます。五味は甘、辛、苦、酸、



都春香の小記録。香席ではこれが配られる



手記録紙。左が名前を書いた物で、右は答えを記入した物

鹹かんです。六国のそれぞれが、どの五味に当てはまるかは実際に香を聞く経験が必要となります。香道では香りを嗅ぐことを聞くといひます。

香道の楽しみ

これらの香木を使用して実際の香道の席（香席）では組香を行います。現代の香席では、その99%以上において組香が行われます。

組香は簡単に言うと、六国の数種類を使用し、その炷かれた順番を当てるゲームのようなものです。しかし真の目的はその当たり外れではなく、貴重な香木の香りを楽しむことにあります。実際の組香について見てみましょう。

都春香

組香の一つである都春香は「見渡せばやなぎさくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける」(古今集 素性法師)という和歌を証歌とします。証歌とは組香の主題のことで、この証歌の世界を数種類の香で表現します。

この証歌をもとに、柳・桜・ウという三種類の香を用意します。柳・桜については試香というヒントとなる香が炷かれるので、その香りをよく覚えておきます。試香を聞いた



乱箱。決まった場所に各道具を置く

後、本香ほんこうという順番をあてる香が炷かれます。本香では桜が2つ、柳が2つ、ウが2つ計6個の香を順不同にして炷きます。ウの香は試香がありませんが、ウは桜の香でも、柳の香でもない香をウと考えます。

本香の6個の香を聞き終えた後、その出たと思う順番を手記録紙という解答用紙に記入します。ただこの都春香では出た順番をそのまま書くのではなく、下附したつけという解答方法に従って記述します。これは二炷開きといい、答えを2個ずつ組み合わせて解答します。つまり1・2炉目、3・4炉目、5・6炉目、それぞれ「聞きの名目」から計3個の答えを手記録紙に記入します。この下附には「嵐山」「都の霞」のように桜の頃の京都の風情が織り込まれ、より組香の

情趣を増加させます。

ここで「ウ？」という疑問が出てくるかと思ひます。ウは客香きやくかうと言ひ、多能な意味があります。桜の季節に都にいる自分、証歌を詠んだ素性法師、あるいは都の空気など、香を聞く人が想像を自分で膨らませるよゆうにという事で、あえてウとしてあります。

このような組香は数百種類あり、菖蒲香あやめこう・紅葉香もみじこうなど季節により色々なやり方があります。

香道具

香席では専用の道具を使用し、香元かうもとが香を炷たくきます。乱箱みだれぼこに入れて香席まで各道具が運ばれます。乱箱左上から手記録盆てきろくぼん、本香盤ほんかうばん、中段左から試香盤こころみこうばん、香筋建きょうじんたて、重香合じゆうかうごう、下段左から総包そうづつみ、聞香炉ききかうろとなります。これらの道具が香元の前に展開され、香が炷かれます。香道具には繊細な蒔絵の意匠がほどこされ、それだけでも芸術品としての価値があります。

香道では「香を聞く」という言葉に代表されるよゆうに、貴重な香木をただ良い香りだと嗅ぐのではなく、色々な事を考え、鑑賞するために様々な工夫が



香席の様子。手前の着物の女性が香元

なされた芸道です。しかし初めて香席に参加する方には、肩ひじを張らず香りを楽しむくらいの気持ちで参加していただければと思ひます。



香元は各道具を自分の前に置き香を炷く